AACK 京都大学学士山岳会 No.76

Newsletter

February 2016

http://www.aack.or.jp

目　次

会員　田中二郎氏が国際狩猟採集民学会の「生涯功労賞」を受賞
市川光雄 1

ラダック山脈、ゴンマ峰他に初登頂（2012）
栗本俊和 2

第 35 回雲南懇話会（2015 年 12 月 19 日開催）、その講演概要
前田栄三、安仁屋政武.....6

山岳保険と山行計画書について（お知らせ）
AACK 事務局.....8

AACK ニュース 9

会員動向 9

事務局から 9

AACK Newsletter 執筆要領（暫定版）.....9

編集後記 10

会員　田中二郎氏が国際狩猟採集民学会の「生涯功労賞」を受賞

市川光雄

本会会員（昭和 34 年度入学）の田中二郎氏が平成 27 年 9 月にウィーンで開催された国際狩猟採集民学会（International Society for Hunter Gatherer Research）で、長年に及ぶ狩猟採集社会研究の功績によって「Lifetime Achievement Award」を受賞された。

この学会は 2014 年に設立された新しい学会であるが、設立に至るまでに実に 50 年近くも国際会議の実績を積み上げてきた。第 1 回の会議は、1966 年 4 月にシカゴ大学において、Man the Hunter と題して開催された。会議の主催者は、今西錦司先生とも面識があった人類進化研究の泰斗 Sherwood Washburn の弟子筋にあたる Irven DeVore と Richard Lee である。この会議には、当時、狩猟採集社会研究にたずさわっていた第一線の研究者がはじめて一堂に会して最新の成果を発表するとともに、狩猟採集社会の民族誌的研究をもとにした人類進化研究や人間性の本質に関して熱い議論が交わされた。1968 年の暮れにこの会議の成果として出版された Man the Hunter は、当時の狩猟採集民研究を志す者にとってはバイブルのようなもので、私たちも大学院で人類学を学びはじめた頃にこの本をぼろぼろになるまで読んだものである。

狩猟採集社会に関する会議（Conference on Hunting and Gathering Societies、略称 CHAGS）はその後、カナダ、ドイツ、イギリス（ロンドン）、オーストラリア、アメリカ（アラスカ）、旧ソ連（モスクワ）などで数年ごとに開催され、1998 年には日本の国立民族学博物館で第 8 回目が開催された。そして、最初の会議が開かれてから半世紀近く経った 2014 年に正式に国際狩猟採集民学会として新しいスタートを切ることになった。翌 2015 年にウィーンで第 11 回目の会議（CHAGS11）、学会としては最初の研究大会が開催された機会に、この会議の歴史と同じくらいの期間を狩猟採集社会研究に費やしてきた先達に賞が贈られることになった。この会議の創始者ともいえるトロント大学名誉教授の Richard Lee（ブッシュマン研究）とタンザニアで長年ハッザの研究を進めてきたイギリスの James Woodburn 博士、田中二郎氏の 3 名が受賞し、学会の終身名誉会員に推挙された。いずれも、個人としての狩猟採集民研究に関する卓越した業績に加えて、多くの優

れた後進の研究者を育成したことを讃えてのものである。世界の狩猟採集民研究を牽引してきた卓越した研究者としてわが国から田中二郎氏が選ばれたのは、実によろこばしいことである。

左より田中二郎、Richard Lee、James Woodburn の諸氏。ウィーン市庁舎の晩餐会会場にて（高田明氏撮影）

田中氏の業績についてはあらためて紹介するまでもないと思うが、南部アフリカのブッシュマン研究のパイオニア、そして世界の狩猟採集民研究を代表する研究者として数々の著作がある。2004 年に京都大学を定年退職したあとも、「ブッシュマン、永遠に：変容を迫られるアフリカの狩猟採集民」（昭和堂）や「The Bushmen: A Half-Century Chronicle of Transformations in Hunter-Gatherer Life and Ecology」（Kyoto University Press & Trans Pacific Press）などの著作を精力的に出版されている。また、趣味としてこれまでに書きためてきた俳句集も近く出版される見込みと聞いている。

授賞式は 9 月 10 日に会議の晩餐会会場となったウィーン市庁舎（Rathaus）でおこなわれた。残念ながら私は前夜の発表準備で疲れてホテルで休んでいるうちに寝入ってしまい、授賞式には間に合わなかった。事前に知っていればもちろん居合わせたはずであるが、受賞の件はサプライズということで、当日までご本人たちにも伏せられていたということである。

栗本氏、AACK の見解は NewsLetter No.77 に記載。

ラダック山脈、ゴンマ峰他に初登頂（2012）

The First Ascent of Gongma (6138m) and Gyap Kangri(6109m) in Ladakh Range (2012)

栗本俊和（Toshikazu KURIMOTO）

1. 概要

2010 年に初めて外国人の登山者に入域が許可されたラダック山脈東南部は、年間降水量 100 mm 以下の高地砂漠とでもいえる、ほとんどが砂と岩の中の 6000 m 級の山である。技術的に難しくは無いが、登山に関する公式な記録はほとんどなく、探検的な登山となる。当初の計画は、最初にパンゴン山脈の未踏峰に登り、次にラダック山脈を東から横断しながら 6000 m 級の未踏峰に登るという計画であった。しかし、結果は、ラダック山脈に西側から入り、6000 m 級の未踏峰 4 座に登頂した。

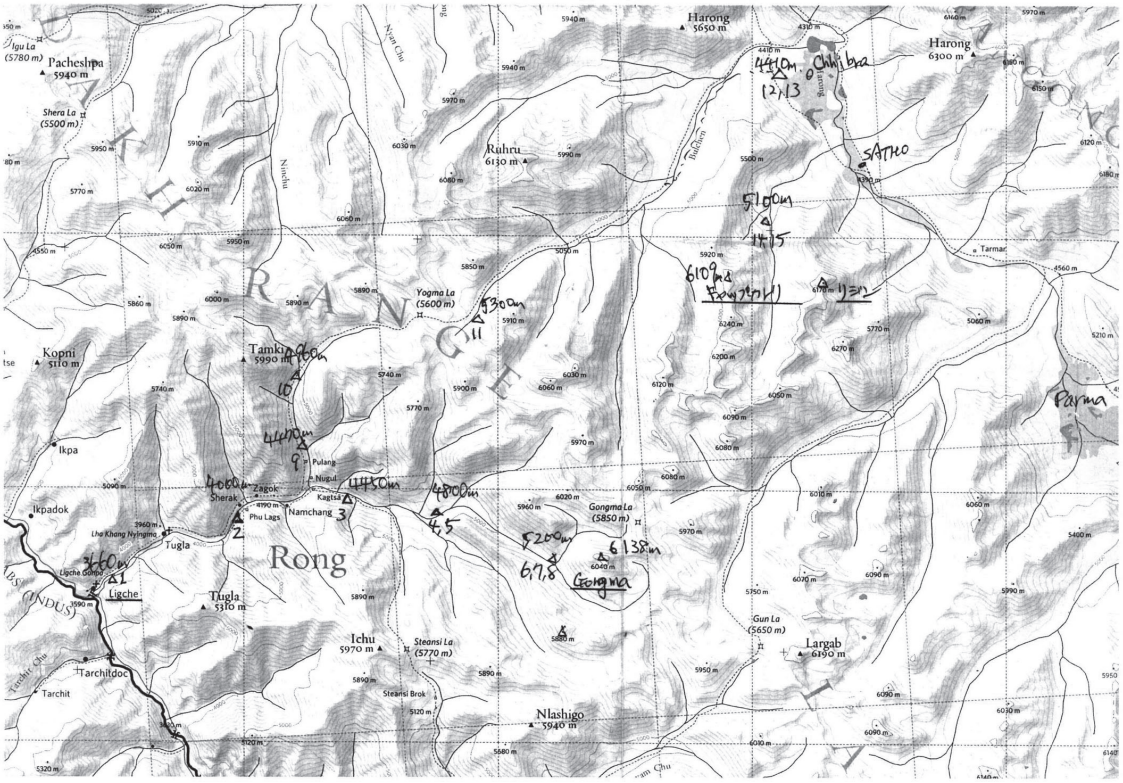
2. 期間

2012 年 7 月 28 日～ 8 月 18 日までの 22 日間。

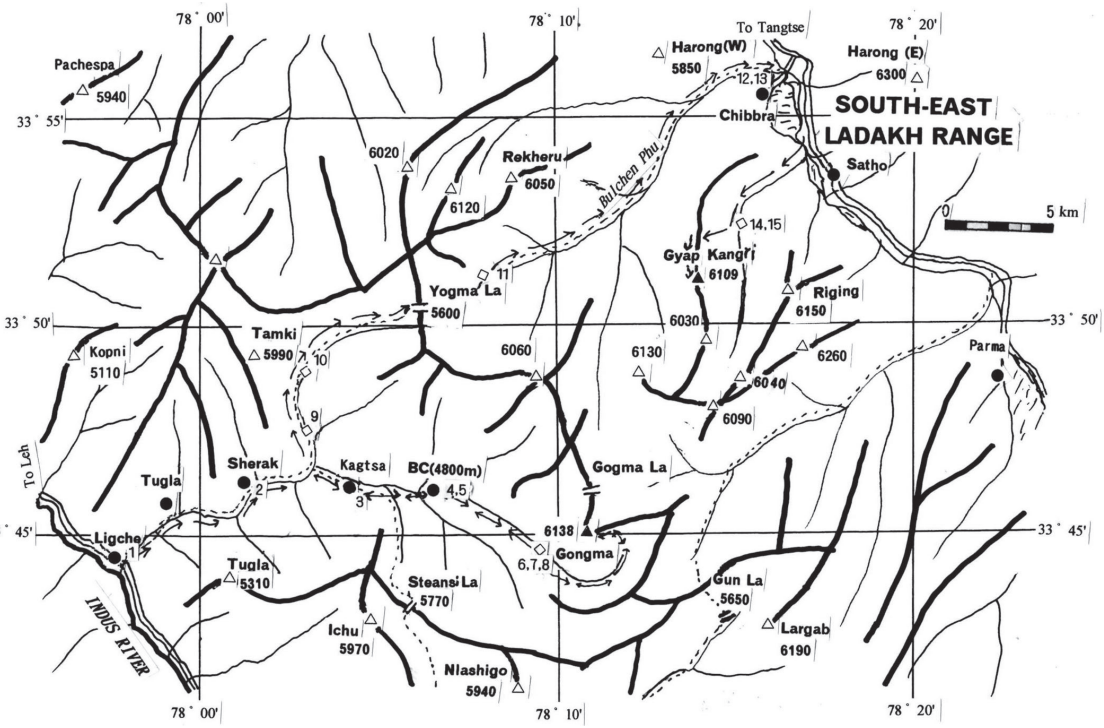
隊の構成・ニュージーランド人（Jamie Mcguiness）がオーナーであるレーに事務所のある旅行社（Project-Himalaya.com）が募集・主催する登山隊で、Jamie Mcguiness 隊長以下、Trevor Heslop、Fiona Blair のニュージーランド人、スコットランドから Jaime Acutt、カナダから Murray、そして、日本からは平岡竜石、平岡朋子、白井和美、栗本俊和の計 8 名参加の国際隊である。

3. 登山記録

レーから車で、インダス川に沿って進み、レー・マナリ道路の分岐点の Upshi を通過し、約 16 km 先にあるレーの東南約 60 km、インダス本流の Ligche（3590 m）から東の支流に入る。東南にトゥグラ（Tugla, 5310 m）のピークがある。支流に沿う車道を Tugla、Sherak（3990 m）と集落を経由し、道路の終点のゴンマ・ラ



地図１　ラダック山脈東南部ゴンマ峰周辺図（Olizane 地図より編集）
1，2，3の書き込み数字はテントサイトの位置で、1は1日目の7月31日、2は8月1日を示す。



地図２　ラダック山脈東南部

（Gongma La）とヨンマ・ラ（Yongma La）の分岐点から、高所順化を図るためゆっくり歩いて途中一泊し、レー出発後、4日目の8月3日にテントサイト（4800 m）に着き、ここをBCとする。ここではじめてゴンマ（Gongma, 6138 m）峰を見る。近くに小さな湖がある。

3.1. ゴンマ峰（Gongma、6138m）登頂［約33°45’N - 78°11’E］

8月6日午前5時5分、5200 mのテントサイトACを出発する。ゴンマ峰はACのすぐ東側にそびえている岩山だが、こちら側からは登れない。南側の沢をつめ東側に回りこんで徐々に高度を上げていく。

日本人4名にスコットランド人Jaimeを加えた5名である。沢の南側にそびえる5880 mの未踏峰が、北面に雪を全面的に被ってそびえているのが最初に目に入る。この山はニュージーランド人のTrevorがこの日単独で登頂した。高度を上げると、グン・ラ（Gun La, 5650 m）の東側にそびえるラルギャブ（Largab, 6190 m）が大きく姿を現わす。ガラガラの岩場で、岩、石が不安定で崩れそうのなので慎重に足場をチェックしながらの登高である。午前10時50分にピーク手前の肩のような所に達し、休憩する。パンゴン山脈の山々も見える。

頂上稜線に達すると、その先に岩場の最高所が目に入る。午前11時50分に平岡竜石、白井和美、栗本俊和の日本人3名が登頂した。頂上稜線は長さ100 mくらいあり、北側斜面には雪をつけている。最初に到達した頂上にケルンを積む。GPS高度は6138 mで、最高所の岩場は6150 mを越えている。Leomann地図には6300 mの記載があり、Olizane地図記載の6040 mと差がある。周囲の状況からして6100 m台の山と考えられ、6138 mを採用した。

写真１　ゴンマ峰（Gongma, 6138m）

写真２　ゴンマ峰、最高所は岩場

ラダック語で、GongmaはUp（上）、北にあるYogma La（5600 m）のYogmaがDown（下）の意味であり、村から見て、上の峠Gongma La、下の峠Yogma Laで、そのGongma Laの近くにそびえる鋭い岩山がGongmaと呼ばれたと思われる。周囲にこの山より高い山はなく、この近辺では最高峰である。反対側にあるラルギャブ（Largab, Leomann地図6050 m、Olizane地図6190 m）と対じしている感じである。午後4時30分、ACに帰着した。

3.2. ヨグマ・ラ（Yogma La, 5600 m）を越える

8月7日、明日のゴンマ・ラ越えの偵察を兼ねて11時半出発、5450 mまで登ってゴンマ峰の写真を撮影したが、西端は岩峰、北面は雪面であった。夕方から雨が降りだす。

8月8日、体調の良くない隊員がいて、5850 mのゴンマ・ラ越えは無理との隊長の判断でヨグマ・ラ越えに変更する。昨日は、カナダ人Murrayがやはり高山病で下山し、レーまで戻った。

午後1時50分、道路終点の分岐点に戻り、ヨグマ・ラに向い、テント場4470 mに着く。翌日は雨であった。

8月10日、午前8時半に出発し、沢をつめていく。右、東向きにかわり、振り返れば、西側にあるタムキ（Tamki, 5990 m）の頂上が白い。未踏峰だろうが、ここからでは1日ではむつかしそうである。沢から少し登り、平らな高

写真３　リジン峰（Riging, 6170m）、チブラ集落より

写真４　ギャップ・カンリ峰（Gyap Kangri, 6109m）

原に出て、乗越になっているヨグマ・ラに全員が着いた。峠から下山し、テント場（5300 m）に着くと、パンゴン山脈のハロン峰（Harong (E)、6300 m）が見え、また、日本隊が登ったピークすなわち Leomann 地図ではルケール峰（Rukheru, 6050 m）、Olizane 地図ではルヘール峰（Ruhru、6130 m））も見えている。テント場の後ろには、5900 m の無名峰がそそり立つ。

3.3. ギャップ・カンリ（Gyap Kangri, 6109 m）登頂［約 33˚51’N - 78˚14’E］

8 月 11 日、ハロン村の方向に下山する。ヤクの大群に出会う。途中に流入する支谷の奥にはヨグマ・ラの方向に白い 6000 m の無名峰が顔を出す。そして、ハロン村の広い草原（4410 m）に下山する。真近に小川の流れる広い草原は、パンゴン山脈の山々を眺められる最高のテント場である。しかし、正面のハロン峰の登路になる谷には草地が見られず、テント場も見付けられないようだし、落石が多そうなので登攀対象から外した。

日本隊が登ったマリ峰（Mari, 6585 m）とその右奥にパンゴン山脈の最高峰カンジュ・カンリ峰（Kangju Kangri, 6724 m）などが見えている。リジン峰（Riging, 6170 m）も目の前に見えている。広い草原の向こう側には、チブラ（Chhibra）の集落があり、狭い流れを渡って出かける。小さな村にもゴンパがあり、お参りする。今日の偵察の結果、日本人は白い雪を被った谷奥にある山（ギャップ・カンリ）を、ニュージーランド人はリジン峰を目指すことになった。山名は、サトー（Satho, 4400 m）の集落で呼ばれている名前である。

写真５　ギャップ・カンリ峰、山頂へ続く雪面

8 月 14 日、日本人 4 名は、午前 5 時 20 分に出で、雪面右のガラガラの岩石混じりの尾根を登って稜線（5930 m）に午前 9 時 50 分着。稜線を辿ってギャップ・カンリ（GPS 高度 6109 m）に登頂した。この日、ニュージーランド人 2 名はリジン峰（6170 m）に登頂した。

8 月 15 日、8 時 50 分テント場出発。途中で振り返ると、昨日登ったギャップ・カンリ峰の北面の雪渓が目に入る。雪渓右側のコルへ登り、そこから雪面を登った。パンゴン山脈のマリ峰が大きく見えてくる。平らな草原を横断し、小さな橋を渡ってパンゴン山脈側のサトーの集落に下山し、今回の登山は終了した。

（注）参考文献

1）詳細な登山記録は、栗本俊和 HP、世界の山・日本の山「ラダック山脈 6000 m 未踏峰の山旅」
2）日本山岳会東海支部編「インド・ヒマラヤ」2015 年、pp.216-217

第 35 回雲南懇話会（2015 年 12 月 19 日開催）、その講演概要

前田栄三、安仁屋政武

第35回雲南懇話会は、2015年12月、東京市ヶ谷の JICA 研究所国際会議場で開催され、128名の参加を得て、盛況の裡に終了致しました。

以下、概要を紹介致します。

①「騎馬鷹狩文化の起源を求めて」
―アルタイ山脈に暮らすカザフ遊牧民と鷹匠の民族誌―

特定 NPO 法人「ヒマラヤ保全協会」理事、
農学博士（ドイツ、カッセル大学）
相馬 拓也

モンゴル西部バヤン・ウルギー県の少数民族アルタイ系カザフ人の牧畜社会では、イヌワシを用いた鷹狩技法が今も存続し、同県内には90 名程度の鷹匠（鷲使い）が現存する。話者が 2006 年 9 月より行っている、アルタイ地域に根づく「騎馬鷹狩文化」と鷲使いの民族誌について、概説された。

イヌワシはメスのみを馴化させるという。素晴らしい能力を持ったワシを「クラン」と言って呼び表し、イヌワシを称える最高の呼称であると云います。騎馬習慣の必要性、給餌動物の適性、頻度、分量など詳述され、鷹狩と伝統知継承の社会条件等にも言及された。イヌワシ 1 羽に必要な食肉量は、ヒツジ・ヤギ 7 ～ 12 頭分 / 年と推測している。(偶々 2015 年 12 月 26 日のテレビ東京で、モンゴル西部に住むカザフ人一家の様子が放映され、「カザフ人の誇り」という「イーグルハンター」を目指す 3 人の息子と娘（11 歳）の姿、イヌワシの給餌の様子も描写されていた。)

話者は延べ 400 日以上の住み込みによる綿密な調査を行い、豊富で貴重なデータを提供したのが特に印象に残りました。

会場風景、講師は穂苅康治氏、撮影者は金井義介氏

②「慈恵医大槍ヶ岳山岳診療所の活動報告」
―山岳診療所から見える山の世界―

慈恵医大槍ヶ岳山岳診療所医師、
聖マリアンナ医科大学スポーツ
医学講座講師　油井 直子

日本の山岳診療所が開設・運営されてきた歴史、槍が岳診療所の施設の紹介、ボランティアチームによる診療活動・生活の様子、症例紹介（低体温症、高山病等）、自身が経験した中で最も重い症例（槍の穂先直下のはしごから転落、頸椎損傷で手足が動かず）などが語られた。

診療所と警察・自衛隊所属の医師及び救助隊との関係、高山病対策・具体的処置、低体温症予防のため予め取るべき有効な方策、診療所利用者の事故原因等の傾向、ボランティアに対する支援策など、寄せられた質問に答えた。次の話者（穂苅康治氏）の祖父が松本で世話になっていた医者が慈恵医大出身といい、この事が縁となって、昭和 25 年から槍の肩に診療所を開設することに繋がったといいます。以来、毎年 7 月 20 日から約 1 ヶ月間、登山者の健康管理を行なっています。

診療所は完全なボランテイアで成り立っている。最近はボランティアの参加が多く、嬉しい悲鳴を上げているそうです。

③「幡隆上人の槍ヶ岳開山と飛州新道」
―信州の鷹匠屋・中田又重郎と共に―

槍ヶ岳山荘グループ代表、
笹ヶ峰会　穂苅 康治

江戸時代末期に槍ヶ岳を開山した越中国新川郡川内生まれの念仏行者、播隆上人の偉業、そして播隆の偉業を現場で支えた中田又重（or 又重郎とも言う）、信州は勿論美濃や飛騨、尾張の信者たちの帰依する様子を紹介された。

柳宗悦著「宗教随想」から『ウエストン以前、恐らく修験道の行者達でこれ（登山）を試みた者は相当にあったと思えるその中で最も偉大な一人と思われるのは播隆上人である。もしウェストンが播隆上を知っていたら、大なる先駆者として絶大な讃辞と敬意を、播隆上人に献げたであろう。』とある一節も紹介された。

1840 年、播隆上人は槍ヶ岳登拝者のために「善の綱」と呼ぶ鉄鎖を山頂部に懸垂された。浄財を募り、素材を集め（寄進され）鋳造し、運搬、荷上げ、設置（懸垂）など…多くの苦労、筆舌に尽し難い苦労、長い年月があったであろうことは、想像に難くない。このことからも播隆上人を支えたのは、広範な地域の多くの民衆の「願い・祈り」であったことがはっきりと判る。己れを律し、ひたすら苦行に励む播隆の法話は民衆の心を打ち、開山に結びついた。

播隆上人、そして現場で上人を支えた中田又重のことは、もっともっと多くの方々に知って欲しいと思います。

④「茶の原産地としての雲南」

（茶の文化振興会）豊茗会会長、
（元）愛知大学教授　松下 智

中国の長い歴史のなかで、西双版納が明記されるのは、新中国設立後である。新中国設立以前は、その辺りは、タイ族により 12 の区分で支配されていた。西双版納の多くの民族は、茶の飲用以前はビンローの嗜好があった。茶の原産地究明は西双版納については明らかにならないが、西双版納東部山地に続くラオス、ベトナムの産地で解明されつつある。今回は、雲南と雲南周辺の地域を視野に置いて、茶の原産地に係る研究の成果を紹介された。

以下、配付資料から抜粋して転載する。

・茶の木を見ると、江南の中心地とみられる洞庭湖の西側山地「武陵山」まで、雲南地方から数千年余の年月で、たどり着いたのではないかと推測される。そして、この武陵山の山地に住む蛮族、瑶族によって、利用が始まり、現在まで広く伝えられてきたのではないか、と考えられる。瑶族は、盤王を神として崇拝しているが、これは漢族の崇拝する神農と同時期に始まっている。茶の木が育つ武陵山から、北方の漢族の住居地まで、茶が送られてきたわけである。

・雲南省西双版納の民族が茶の木を利用するようになったのは、宋代、元代、さらに明代になって瑶族が西双版納に移住するようになってからではないか、と考える。西双版納の茶といえば、勐腊県の北西に発達した「六茶山」と云われる古い茶産地があるが、現在では、茶産地としての面影は見られない。しかし、瑶族と同じ時代に開発されたとみられる「基諾山」だけは、基諾族によって現在も茶産地として発展している。（転載終り）

60 年かけて中国南部から東南アジアを隈なく歩き、茶の原産地を探り当てた探求心に感銘を受けました。

⑤「遊牧、移牧、定牧」―モンゴル、チベット、ヒマラヤ、アンデスのフィールドから―

愛知県立大学名誉教授、放送大学教授
稲村哲也

話者はペルー・アンデスの標高 4000 m を越える高原で、リャマとアルパカを飼う牧民の調査を長く続けてきた。ヒマラヤでは、ヤクなどを飼育するネパールのシェルパ民族を始め、ブータンやインドなどでも調査を行なってきた。2 大高地を中心に、モンゴルも加え、牧畜を中心に人々の生活を紹介しながら、人と自然の持続的な関係、外部世界との関係等について、略述された。

農耕が不可能な環境―寒冷地！ 高地！ 乾燥地！―に家畜を飼うことで適応し、持続的な生活を送る人（牧畜民）について、6 地域を取り上げ、「移動」に焦点を当てて比較された。

・遊牧：モンゴル・ゴビ沙漠（乾燥地で標高約 1,000 m）の例
・遊牧と狩猟：モンゴル北部トゥバ民族（タイガ地域、標高 1,800 ～ 2,400 m）の例
・遊牧：インド・ラダック地方（チャンタン高原、4,600 ～ 4,900 m）の例

・移牧：ネパール・シェルパ民族、ヤクとゾモの移牧、2,500 ～ 4,500 m、農牧民の例
・移牧：ブータン・ブムタンの２重（ヤク・ゾモ（4,500 ～ 3,000 m）＆ジャツァム（ミタンと牛のハイブリッド、3,000 ～ 1,500 m））の移牧の例
・定牧：ペルー・アンデス、ケチュア民族（アレキーパ県）。リャマとアルパカの牧畜（標高 4,500 m 前後の高原で１年中放牧）の例

何しろ 40 余年に亘る牧畜（遊牧、移牧、定牧）研究のお話である。演題と同名の参考文献（ナカニシヤ出版、2014）で深耕を図る必要性を痛感するばかりです。

以上です。

第 36 回雲南懇話会のお知らせ

1. 日時：2016 年 3 月 19 日（土）12 時 45 分～17 時 30 分。茶話会 17 時 30 分～ 18 時 40 分。
2. 場所：JICA 研究所 国際会議場（東京、市ヶ谷）
3. 懇話会の内容

＜講師、演題、講演の順序など変更ある場合は、ご了承をお願い致します。＞

①「カイラス巡礼とグゲ王国」―西チベット・古格王国（842 年～ 1630 年）への旅路―
都留市文化協会副会長、写真家　藤本 紘一

②「標高 8,000 m から眺めた星空の魅力」―マナスル峰で試みた天体観測―
（元）プラネタリウム解説員　村山 孝一

③「ハニ族における稲作農耕と伝統的知識の継承」―雲南省紅河州に見る棚田文化―
首都大学東京 人文科学研究科博士後期課程、紅河学院国際ハニ / アカ研究所訪問研究員
阿部 朋恒

④「浮上式鉄道開発の経緯と中央リニア新幹線の動向」―夢・今・これから―
（元）（公益財団法人）鉄道総合技術研究所
技師長　藤江 恂治

⑤「DNA から見た日本人の起源」―日本人成立の経緯―
（独立行政法人）国立科学博物館
人類研究部長　篠田 謙一

山岳保険と山行計画書について（お知らせ）AACK 事務局

1. 山岳保険の団体加入から個人加入への切り替え

AACK ではこれまで山岳共済と同山岳保険の加入希望者を取りまとめて、AACK として団体加入してきましたが、2015 年 5 月の理事会で検討した結果、今年度（2015 年度）をもって休止することになりました。すでに加入しておられる皆様には、今後は**個人として加入**していただくことになりますが、どうぞご了承ください。

加入者は近年ほぼ変わらず、また継続の手続きが口座振替の利用により非常に簡単になり、会として経費・労力をかけて取りまとめることのメリットがなくなったことによります。

なお、相談窓口としての機能は当面残し、横山会員（連絡先は下記）が担当しますので、必要あればご連絡ください。

2. 山岳共済相談窓口

氏名：横山宏太郎（ヨコヤマ　コウタロウ）
住所：〒 943-0832　上越市本町 2-1-12-801
（ジョウエツシ　ホンチョウ）
e-MAIL：peng-y@amy.hi-ho.ne.jp（横山自宅）

横山会員宛の問い合わせ・連絡は原則として電子メールでお願いします。

3. 山行計画書

これまで、AACK として山岳共済に団体加入している方には、「ハイキング以外の山行では一週間前に計画書の提出」をお願いしてきましたが、これは次年度から発展的に解消し、あらためて全会員に、計画書の提出を求めることになりました。ご承知のとおり最近では登山全般において山行計画書の提出が求められている事情によります。

2016 年度から、日帰りハイキング以外の山

行をされるAACK会員は、山行計画書を提出してください。これは事故発生時にAACKが会員はじめ各方面に対応するときに山行内容を把握しておく必要があるため、お願いするものです。最近は警察等関係機関への山行計画書の提出も電子メールで可能となっていますので、それと同時にAACK担当者へもお送りいただくのが便利と思います。

会員が複数参加される場合は、パーティーで一枚提出してください。

4. 山行計画書の提出先とご注意

提出先氏名：永田　龍（ナガタ　リュウ）

原則としてワープロなどで作成したファイルを電子メールに添付してお送り下さい。提出はなるべく早くお願いします。

下山後、永田会員へ速やかに電子メールなどで下山報告をしてください。

永田会員が担当するのは登山計画書のとりまとめで、留守本部ではありません。留守本部は必ず山行計画者が自己の責任で定めてください。万一の事故発生の時の捜索救援体制も、山行計画者が事前に検討しておくべきことであることをご承知ください。

5. お礼

山岳共済団体加入と山行計画書提出は約10年前に始まりました。担当者としてその立ち上げから長期間ご尽力いただいた堀内　譚会員、阪本公一会員にお礼お申し上げます。横山、永田両会員には感謝するとともに引き続きよろしくお願いいたします。

6. その他

山岳共済と保険については、以下のホームページをご覧ください。

日本山岳協会山岳共済事務センター

http://sangakukyousai.com/

問い合わせ電話番号　03-5958-3396

AACKホームページの案内は今後更新の予定です。しばらくお待ちください。

AACKニュース
副会長・山岸久雄氏が「SGEPSSフロンティア賞」を受賞

2015年11月、山岸久雄・国立極地研究所名誉教授が地球電磁気・地球惑星圏学会（Society of Geomagnetism and Earth, Planetary and Space Sciences）の「SGEPSSフロンティア賞」を受賞されました。受賞理由は、「極地における電波・磁場観測技術の開発と基盤整備による磁気圏・電離圏研究への貢献」です。たいへんおめでとうございます。

山岸さんの受賞の言葉と関連記事が、同学会の会報225号（http://www.sgepss.org/sgepss/kaihou/kaihou225web.pdf）に掲載されていますので、あわせてご覧ください。

会員動向

会員異動

事務局から

2016年度一般社団法人京都大学学士山岳会総会は、2016年5月29日（日）に開催の予定です。詳細につきましては、後日改めてご案内致します。

AACK　Newsletter執筆要領　2016年1月（暫定版）

1. 体裁

B5判、縦置き、横書き、21字×46行の2段組です（第70号から、横書きとなりました）。

したがって本文のみの場合は、刷り上り1

ページは1800文字程度となりますが、表題・著者名などが入りますので、実際にはこれより少ない文字数で1ページとなります。

2. 原稿作成

原稿は、本文だけを、一般的な横書き文書の形式で作成してください。印刷時の形式に合わせる必要はありません。

ワードプロセッサを用いて作成し、電子メールに添付してお送りいただくのが便利ですが、手書き原稿など紙媒体の原稿でも結構です。

原稿の字数・行数は特に指定しません。手書きの場合は市販の原稿用紙などをご利用ください。

写真、図などの説明は、本文の後に、まとめて付けてください。

3. 写真・図

写真や図は、モノクロ印刷となりますが掲載可能です。

写真や図の原稿は、本文に含めず、別ファイル、あるいは別紙としてください。

これらもなるべく磁気ファイルでいただくのが便利ですが、紙媒体でも結構です。

磁気ファイルの場合は縮小せず、原本のままでお送りください。印刷の仕上がりをなるべくよい状態にするためご協力ください。

もしファイルが非常に大きく、電子メール添付では送れない場合は、CD-ROM等の媒体で郵送するか、ファイル転送サービスなどをご利用ください。

4. 校正

初校は著者に校正をお願いします。通常は、電子メールで校正刷りのPDFをお送りします。修正点は、わかりやすい指示をお願いします。

第二校以後は、必要に応じて著者に連絡します。ご協力をお願いいたします。

5. 原稿送り先：編集人　横山宏太郎

この執筆要領は暫定版で、不備も多いと思いますが、参考としてご覧ください。

編集後記

ここ新潟県南西部は暖冬少雪傾向で、山もブッシュで黒っぽく見え、ツアーには条件が悪そうです。しかし、高田の積雪はこれまで最大は62 cmで平年値122 cmの約半分、平地の生活にとっては大助かりです。なお、観測開始以来の最大値は1945年2月26日の377 cmです。

第75号でお知らせした田中二郎さんの受賞について、おなじ専門分野でご活躍の市川光雄さんに詳しい紹介をお願いしました。いまも積極的に登り続けている栗本俊和さんからは、2012年、ラダック山脈の登山記録をいただきました。雲南懇話会はいつも通り興味深い講演概要です。次回予告も載っていますのでご覧ください。原稿をお寄せいただいた皆様、ありがとうございました。次号もよろしくお願いいたします。

山岳保険と山行計画書については、新年度から変更になりますので、記事をご確認ください。

今回掲載の原稿作成要領は暫定版ですが、効率のよい編集ときれいな仕上がりのために、皆様のご協力をお願いいたします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り　2016年4月16日

発行日　2016年2月29日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松沢哲郎
発行所　〒606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究2号館4階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科　竹田晋也　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町1-8
㈱土倉事務所